醍醐寺三宝院庭園の構造と作庭手法

U.D.C. 712.2.032.12

中 根 金 作*

Landscape garden of Daigoji Sampoin Temple ;
its composition and Construction
by Kinsaku NAKANE

と共に仮堂であつたのを秀吉が再建したものである。

註 醍醐雜事記

1

貞観16年(874)笠取山の山上に聖宝僧正によつて開割された醍醐寺は、延喜7年(907)朝廷の御願寺となり、山上には薬師堂・五大堂が造られた。延長4年(926)12月、醍醐天皇は笠取山の西麓に釈迦堂建立の勅願を立てられさせられ、つゞいて下醍醐寺の造営にかかられた。醍醐寺の僧延賀は天皇の勅旨により諸寺の規模を基として伽藍の計画を作つて上奏している。釈迦堂は本堂または金堂と呼ばれ、それに附属する建物の建設は本願である醍醐天皇の崩御後も続けられ、承平元年9月、天皇の周忌の際、伽藍整備がようやく成り、本堂・礼堂・廻廊・南中門・東西中門・経蔵・鐘楼などが完備された。この年11月醍醐天皇の御子代明親王によつて塔を建てる計画がされ、天曆6年(952)10月五重大塔が落成した。これに先立つて天曆3年(949)、朱雀天皇によつて御所清凉殿の古材をもつて法花三昧堂が建てられた。

この堂も早く廃絶したが、これらの三昧堂を中心として下醍醐には伽藍を中心として諸堂諸院が数多く建てられていった。久寿元年(1154)の醍醐寺在家帳には750余字があつた。と記し、そのうち堂42字、塔4基、鐘楼3字、経蔵4字、神殿10社、高倉2字、御倉町3所、湯屋3字、僧房183、御所3等があつたといふ。

平安末期の醍醐寺伽藍の規模については醍醐雜記に5間4面の釈迦堂、7間2面の礼堂、60間の廻廊、八足の中門、鐘楼、経蔵がみな松皮葺であつた。と述べている。義演准后筆の伽藍指図(写真1)によれば、中門の左右から出た廻廊が釈迦堂の両わきに達し、その中庭の南寄りに経蔵と鐘が東西に相對していたことが知られる。永仁3年(1295)9月、醍醐寺創立以来初めての災害である。衆徒によつて金堂の焼失があつた。金堂は乾元元年(1302)に再興されたが、室町時代に入つて、文明2年(1490)7月、大内政弘の兵火により、下伽藍の金堂、廻廊、中門、三昧堂、清凉堂そのほかの子院が焼かれた。その後、伽藍の復興は進まず歳月を重ねたが、桃山時代に至つて、豊臣秀吉の力によつてようやく復興の氣運となつた。

今日の金堂は慶長3年(1598)2月、金剛輪院の再興

2

三宝院は永久3年(1115)に座主勝覚が創立し、伽藍の西大門の内の北側にあつた。天承元年(1131)僧定海は院内に灌頂堂を建て、鳥羽上皇の御願寺として、毎日兩界供養法を勧修し、毎年結縁灌頂の大会を行つた。灌頂堂が三宝院の主要な堂となつたために、三宝院のことを指して灌頂院とも呼ばれた。勝覚僧正より以後の歴代醍醐寺座主は三宝院を本房とすることになつた。

創立当時の三宝院の建物は、5間4面の灌頂堂、堂の南に6間の礼堂があり、灌頂堂の西には5間2面の廊があり、その廊の西端から南に折れて9間の中門廊があり、その南端に中門があつた。中門の外には四足門があり、5間の経蔵と宝蔵が建っている。寝殿は7間4面で、座主の居所であつた。これに付属して5間1面の侍廊、3間2面の客侍、護摩堂、持仏堂、隨身所、雜舎、湯屋、厩があつた。(註)

正治2年(1200)貞永元年(1232)文保2年(1318)と三宝院は3度焼けた。文保の火災後は荒廢にまかせられたが、応安年間座主光濟僧正により、灌頂堂、廊、北対屋、西四足門などが再興され、応永31年には灌頂堂が修現され、棟門が建てられている。その後三宝院(灌頂堂)は文明2年(1470)の兵火に焼けて、敷地はながく荒廢して林地となつた。

桃山時代に至り、豊臣秀吉の力によつて再興された三宝院は、灌頂堂の旧敷地ではなく、金剛輪院(現三宝院)の敷地において行はれた。金剛輪院は、正和3年(1314)に座主となつた権僧正賢助が創立したところで、文保2年に三宝院が焼失してから座主の住居とされていたのである。正中2年(1325)金剛輪院には鎮守五社宮の遷宮を行い、応永20年(1413)護摩堂を造営、永享元年(1429)経蔵を造営し、常御所を造り、同6年(1434)に御厨所を造営されている。文明2年には伽藍や三宝院とともに焼け、大永5年(1525)に寝殿が造営されたが、再び弘治2年(1556)に焼失し、その後荒廢していたが、天正3年(1575)にいたり座主義演によつて再興に着手されたのである。

* 京都府教育庁文化財保護課

3

慶長2年(1597)3月8日、豊臣秀吉は、徳川家康をはじめ諸大名を相手に醍醐に花見を行つた。この花見は秀吉には大いに気に入つたらしく、彼はさらに翌慶長3年(1598)再び大規模な花見を行うべく計画を立てたのであつた。秀吉はこの花見の準備に先立つて、慶長3年2月9日に醍醐にまづ自ら実地踏査を行い、花見に使用する御殿や茶屋の建築や、荒廃している五重大塔、仁王門の修理を奉行に命じている。

義演准后日記 慶長3年2月9日晴

太閤御所頓当寺へ御成、則桜馬場ヨリ門路へ直ニ渡御堂小座敷常御所台所ニ至マテ悉御覽、泉水事外御称美北政所始テ秀頼様花可有御覽ノ為ニ先御成也、則当門へ可有御成故也、塔婆修理最中也、弥堅固被仰付了、殊ニ王門可致修理之旨同被仰出了、満足只此事也、山上ヤリ山景以外御意ニ入、彼山ニ御殿数字花ノ前ニ悉周備乃様子ト奉行ニ被仰付了、其後還御路次ニ於テ菓子折進上、御機嫌一段ト快然也、案堵此事く、下略

そして秀吉は花見のための桜については、近江・河内・和泉・山城の四ヶ国の吉野桜700本を桜馬場から檜山にかけて道の左右に移植している。(註1)

秀吉はこのとき花見に用うる建物の新築や既存の修理を行つたばかりでなく、当時醍醐寺座主の住房であつた金剛輪院の殿宇、庭園の大築造計画を立て、そして実行したのである。即ち秀吉は、2月16日にも醍醐にきて、金剛輪院の敷地の広さや諸建物の大きさについて指図を行つている。彼の計画の金剛輪院の敷地は、東に灌頂院の過半と、西に宝塔院まで、南に桜馬場を広庭に取り入れ、北は東安寺を包含した。その面積は120間4方にも及ぶ広大な区域に亘つた。秀吉によつて行はれた金剛輪院(三寶院)の建物庭園の大整備工事については、当時の醍醐寺座主であつた義演准后の日記によつてその大要を知り得るのである。義演は秀吉が金剛輪院の工事について並々ならぬ熱意を示めし、現地に度々足を運んで自ら庭園の設計を行つていることに深い感銘と感謝の念をもつて、その有様を克明に彼の日記に書きしるしている。

日記2月20日晴

太閤今日御成、直ニヤリ山へ登山、其後門跡へ渡御、御膳御賞瓶、予御相伴、泉水ノナワハリ中島ニ護摩堂檜皮葺一字、橋ヲカケ滝ニ筋落サルヘキ御工也、聚楽御屋敷ヨリ名石可引由被仰出了、泉水ノ余水桜ノ馬場ノ中に横三間ニ可堀下被仰出了、

歴史上著名な秀吉の醍醐の花見のあつたのは慶長3年(1598)の3月15日であつた。この日は秀吉はじめ北政所、諸大名および女房衆が愉快に1日を遊び過したので

あつた。

金剛輪院庭園(三寶院庭園)の築造に着手したのは花見の日から半月余り遅れた慶長3年4月7日からであつた。そして、庭奉行として新庄越前守直定、竹田梅松軒平塚因幡守の三人を命じ、遣り縄張りを行はしめている。

現場工事の直接の工事者であつた河原者仙は人夫300人を指図して大石を引き入れ作庭の工事を進めた。着工早々まづ新庄越前守奉行のもとに名石藤戸石が他の大石三箇と共に立てられている。

日記 4月7日 雨瀝及晩届晴

金剛輪院泉水今日太閤御所ヨリ奉行新庄越前其外衆兩人来ナワハリ致之、

8日 晴

金剛輪院池大石等引入之、三百人斗来、庭者仙来、略

9日 晴

金剛輪院泉水ヘフジト大石今日居了、主人石に用之奉行新庄越前、此外大石三ツ立之、手伝三百人来、略

10日 晴

金剛輪院池普請在之、略

この藤戸石は室町時代から著名な名石であつて永禄12年(1569)に信長が細川右馬頭の屋敷から足利義昭の二条第の庭園に運搬したものである。(註3)そしてこの名石はさらに秀吉によつて彼の聚楽第に運ばれ、金剛輪院の作庭にさいして醍醐に移されたものであつた。秀吉は作庭工事中の金剛輪院を度々訪問して、作庭に関する諸程の下知をなしている。そして作庭に支障となる寺院内の門路堂、集会所、廊等の障害建物を取り除かせている。

4月7日に着工された金剛輪院庭園の作庭は5月13日に終了し、翌14日、庭奉行の新庄越前守、竹田朱松軒、平塚因幡守の三人が秀吉の前に伺候して作庭終了の報告を行つている。そして19日には水の満々と張られた池に鯉鮒が放たれ、金剛輪院の新庭園が立派な形態を整えたのであつた。

日記 5月13日 雨巳刻前

新庄越前守ヘ為音信曝布三端遣之、同平塚因幡守ヘ備袋遣之、何も泉水奉行也

日記 14日 晴及晩雨降

金剛輪院泉水昨日悉出来、奉行竹田梅松同御手伝新庄越前同平塚因幡今日太閤御前へ罷出申入之由申了、珍重く。略、

日記 18日 午刻属晴聊散朦朧

金剛輪院泉水漸水湛、略、

日記 19日 陰晩雨降

元ノ小泉水ヨリ鯉鮒今度の新大泉水ヘ放云々 略、

金剛輪院庭園の作庭は4月7日から5月13日までの36日間にすぎない短期間であつた。如何に当時の権力者であつた秀吉の命令であつて、日々数百人の人夫を使用して工事を急いでものであるとはいえ、多数の石を運び、今日みられる以上の大規模な庭園の作庭が、下地のない全然新たな場所に池を穿ち石組をなして築造をなし得るなどの如き容易に肯定し得ないところである。

金剛輪院には古くから庭園があつたことは慶長2年および翌年3月2月9日に秀吉が金剛輪院において庭園を觀賞していることによつて、知り得るのである。では金剛輪院に古くから存在していた庭園とはどのような形態の庭で、何時頃に作庭された庭園であつたかということであるが、その詳細を知る明確なる資料がない。しかし金剛輪院に古くあつた庭園の作庭の時期と作庭者についてはかなり確実に近い資料が残っている。

註1. 義演准后日記慶長3年2月13日

桜植奉行来、当門馬場ヨリ、ヤリ山ニ至テ左右ニ植之、其間350間有之、桜700本可植云々、江州河州和州当国四ヶ国ノ桜ホリテ可桜云々、吉野ヲ被移也云々、

註2. 義演准后日記、金剛輪院門跡義演准后が文禄5年(1562)正月から彼の寂滅は50日前の寛永3年(1626)4月3日までの約31年間に亘つて書き記した日記。

註3. 言継卿記30 永禄12年3月3日丁未

天晴

1 細川右馬頭庭之藤石、織弾3・4千人にて、笛鼓にて囃之、勘解由小路室町迄、日暮之間、御堀之内へハ不入云々、見物了、驚目者也、

4

醍醐の桜は古来から著名であつた。続門葉和歌集に、三宝院、理性院、地藏院の花を詠んだ和歌が載せられている。醍醐寺第73世の座主満濟准后日記によれば、足利時代における醍醐の花見について知ることができる。

室町時代には、花の最も勝れていたところは醍醐寺49院のうち仁王門の南にあつた妙法院であつた。満濟准后は妙法院において、応永21年(1414)2月29日、および応永31年(1424)2月晦日、花下に一折を張行し、また応永33年(1426)2月22日花見の後、連歌百韻をなしている。永享元年(1429)3月21日には奈良大乘院僧正が醍醐に赴き、寺内の花一見を所望して、大納言僧都宗済が案内している。翌永享2年(1430)3月17日には將軍足利義教が醍醐に花見を行うに先立つて、「任庵主」を醍醐寺に召して、庭園新造の沙汰をしている。3月6日、普請人数300人を召して安富築出守、同越前守等が奉行となり、人夫300余人をもつて阿弥陀院から大石3

箇を引いている。3月17日將軍義教は諸大名を供して雨を侵して花見に来山、地藏院の花を見、そして妙法院に至り花見をしている。山名、赤松、一色、京極等管領以下諸大名は將軍の沙汰により、連歌の席に連り盃を頂戴してその後宿坊に退出している。義教は連歌の後、金剛輪院に入り、准后は灌頂院に帰つた。將軍義教の醍醐の花見に際して満濟准后に召されて庭園の新作庭を命ぜられた任庵主は義教の宿坊となつた金剛輪院の庭園を造つたのである。満濟准后日記、3月4日の条に、

任庵主今召給之。新造庭沙汰之。

とある。慶長3年秀吉が金剛輪院に作庭を行つた際、すでに金剛輪院には満濟准后の依頼により、任庵主の作庭した庭園が存在していたわけである。この頃座主の住房となつていた金剛輪院の庭園は、任庵主作庭になる庭園がかなり整備されていたに間違いのないのである。任庵主は室町時代の作庭界において重きをなしていた人物であつたとみられる。満濟准后日記によれば、永享3年(1431)12月7日、准后は義教に招かれて室町殿に赴き、任庵主によつて庭に大石を立てるのを拝見している。即ち、

七日晴。今日將軍新造御所御覽渡御。可參由以赤松播磨被仰問。御座へ參申了。今日大石被立之。御庭任庵主沙汰。大石畠山赤松自。兩人普請者進之。二三人計兩方ニ在之歟。以外大儀也。

任庵主はまた格西嵯峨鹿王院の庭園の作庭を行つている。蔭涼日録、長享元年(1487)8月13日の条に、足利義政が鹿王院に赴き、任庵主の作庭になる庭園を觀賞し蔭涼軒主龜泉集証の話を聞いている。

相公曰。本房不差合。先可御一覽泉水。愚先往本房。御透之路調之。以前引入本房。熟覽東面之泉水。愚近前白。此石任庵主立之。一乱以來草根悉埋没之。掃除草根則如旧。一石亦不失。相公曰。本房本者南向也。愚諾。相公人芥室内御歴覽。愚白。此芥室額。横川所筆也。額占文木地緑青也。開山墨跡一對普明国師春屋道号頌等掛之。相公曰。誰所筆。答。皆開山国師之真蹟也。

ようやく荒廃に傾いていた桃山時代の金剛輪院は、なお座主の住房であるに変わりはなく、特に作庭に関して非常な熱心さを持つていた義演准后が在持して、その殿宇の整備に手を着けていたのであれば、任庵主作庭による金剛輪院庭園は、義演によつて手入れをされ、かなり優れた形態で残っていたにちがいない。秀吉はこのような金剛輪院の建物を取り除き、庭園を破壊拡張して、自らの意にむくままの庭園の地割りをここに行つたのである。

將軍義教に用いられ、当時著名な室町殿ならびに鹿王院等の庭園の作者であつた任庵主の作庭した金剛輪院の庭園は、室町時代に於ける優れた庭園であつたにちがいない。かほどの庭園を秀吉のためにむぎむぎと破壊されたのは、その変りとして如何程に桃山時代における優秀なる作庭がなされたとはいえ、誠に惜しい気がする。

かようにして秀吉が慶長3年に、金剛輪院の新庭園を作庭せしめたのであるが、その作庭にあたり、旧金剛輪院庭園をどのように改造拡張して、新庭園を築造したか現在の三宝院庭園の池底構造および石組の基礎の状態に表はれた事実を次に述べてみたい。

註 任庵主は將軍足利義教に愛用された禅僧で、増円僧正撰と称する山水並野村図奥書の伝授系図に、中任和尚とあるのは任庵主のことであると思はれる。

系 図

増円僧正夢也四十代者……竜門和尚 尋観法印宗韶善
明国師 中任和尚 浄喜美馬
右庭作之趣。依。為。増語所望。自。中任和尚。相伝
書画巻秘事相承等更不。残。心底。令。相伝。者也。
文安五年正月吉日 美馬入道 浄喜判

5

三宝院庭園の池底堆積泥土のしゆんせつ、石組の補習の目的で、昭和37年1月10日から筆者の行つた修理工事は、三宝院庭園の池底にかくれた下部構造の実態を調査する機会と得難い資料を得ることが出来、前記の如く記録に現はれた三宝院庭園の変遷についての事実を証明するに足る痕跡を明らかに示めてくれた。

室町時代初期に任庵主の作庭したと思はれる旧金剛輪院庭園の跡と思はれる部分は、現在の三宝院庭園の中島から以東に明らかに残っているのが認められる。もとより庭園の表面の庭景をなす、築山、池泉、等の全体の地割および石組の構成は、慶長3年に秀吉によつて始められた作庭と、それ以後において義演准後の指図によつて元和年間に至るまでの長期間に亘つて行はれた作庭によるもので、任庵主の作庭による部分は少しも残っていないと思われるのである。

しかし池底および池護岸の石組の基礎部分には明らかに旧金剛輪院庭園の跡が認められる。そして池の中島を境として池の東部と西部との池底構造が明瞭に新旧の二態に區別出来得るのである。

三宝院の諸建物の中央に位置する表書院（表宸殿ともいう）は庭園の池に臨んで立つ最も主要な建物であつてこの建物は秀吉が自ら指図して作らせた寝殿で、慶長3年11月22日に立柱され、12月21日までに完成したものであることに間違いなく、記録とよく合致している。三宝

院庭園はこの表書院を正面に展開しているのであつて、池の中央やや西に寄つて設けられた中島が庭園の中心をなすもので、この庭園の中心部が表書院の正面になるように作庭されている。（図1、写真2）

したがつて秀吉時代の作庭は、旧金剛輪院庭園の旧池をそのまま利用して現在の中島附近から以西に向つて旧池を堀り拡げて新庭園を作庭したものと想像される。旧金剛輪院庭園の池が、現在の三宝院の敷地の中にどのようにして展開して、その面積はどの程度の広さを持つていたかは、記録もなくもとより明確に知るすべもないが現在の池底の構造形式から察知するに、相当な面積と規模をもつていたことが想像出来る。旧金剛輪院庭園の池と思はれる現在の池中島から以東、瀧口までに及ぶ池面の池底は非常に深く中央においては水深5尺から最も深い部分で7尺を越える。（写真3、4）その池底の構造も堅牢で厚く打つてあり、平均に1尺程度の厚さの池底となつている。そしてこの池底は青粘土、栗石（3寸～7寸程度）小砂利をもつて混合突き固めてある。この古い池底を作る青粘土は時代も古くなり青色の色も退化して灰白色に変化しつつある。（写真5）中島から以西の池底は薄く平均4寸程度で、その構造も前記東部の池底に比して簡単である。用いた粘土も青色の色彩も鮮やかで東部池底のそれに比して新鮮味を帯びている。水深も浅く2尺から3尺程度にとどまる。従つて池底の深さは中島を中心として西部池は水面より浅く、東部池は水面より著しく深い。（図2）

以上の如く旧池と新池の池底の材料構造は相違するが旧金剛輪院庭園の旧池をそのまま利用したと認められる中島以東の池底には、その事実を証明する顕著な例がある。それは池護岸の石組の基礎である。

即ち図2および写真6・7・8・9に示す如く深い池底から積上げる如くなされた護岸石組の基礎部は、その最底部から護岸石組の下部までは4尺から4尺7・8寸以上の高さとなつている。この状態は、この種池底の護岸石組の基礎のやり方としては極めて不自然なもので安定度も極めて悪い。このような構造の基礎の部分は、旧池の上に石組作庭されたと思はれる中島以東の池面の藤戸・石前附近、即ち池の南岸、一帯の護岸、純浄観前の附近即ち池の北岸一帯の護岸および瀧口前の小島護岸、茶室枕流亭前即ち池の東岸一帯の護岸、中島の東側護岸等である。

かように池の東部護岸がなにか故に構造的に無理な安定度の少い構造形式をとつたかといえ、池底の深い旧池をそのままに利用して新池を堀り拡げ拡張して新庭園の地割をなしたがため、庭園の全体の構成上、旧池の相当深い池中にまで入り出して池汀の護岸石組をなさねばならなくなつたものと想像する。従つて新たな石組には

その基礎部において高く積み上げる無理をせねばならなかったであろう。これに反して中島以西の池護岸は新しく掘り下げた池であるために、池底も適当なる深度であり、池底上の護岸石組の基礎部も低く極めて自然な安定した形態である。(写真、10・11・12)

こうした構造的な差は、池東部の護岸石組が崩れ易い構造的欠陥を持つ結果となった。秀吉が慶長3年にこの庭園を作庭してから16年目の慶長20年(1616)には、早くも庭園は荒廃が目立ち、義演はかなり大規模な修復の工事を起している。

日記 慶長20年7月朔日 晴

泉水滝ノ石直之。

7月20日

泉水普請嶋大ニテ水ノ面ニハハル仍過半取去テ少ニ成之。

7月23日

植木共指合タルヨホリテ植替了、池の泥悉取之普、請ノ用意也

7月25日

泉水普請、辰巳角山ノ麓に滝を構

9月朔日

泉水大石ツツ滝へ引寄之、次山上麓ヨリ石取寄之、替請夫七・八十人

9月3日

庭作号賢庭来、滝石八立之、嶋石三立之、先大石立之、祝着々々、中略、院御所勘定ニテ賢庭ト云天下ノ上手也、度々引寄、石立様凡慮、

今回の根本修理にあたつても、前述の如き作庭上の構造的欠陥は、破損が著しい状況になり、局部的には旧態を止めないまでに崩潰していた石組もあつた。従つてこれの補修には困難を極めた。池の中島以西は以東に比して崩れはほとんど少く、2・3の石組のゆるみを補強した程度であつた。

池中島以東の石組基礎は前述の如く旧池を利用したものであるから、室町時代の池護岸の石組基礎の手法、形態をそのまま残していた。即ち上下二段の亀腹形式に打たれた池底の上部段に、護岸汀線にそつて平均1尺から2・3尺程度の大きさの自然石を一列に据え並べて縁取りし、その内側に護岸上部に登る斜面に栗石(5寸〜7寸程)を一面に敷きつめて補装し、その上部にさらに石組下部の根石を据えて石組をなしている。(写真13・14)このような石組基礎の構造形式は吉野時代、室町時代(西芳寺庭園、鹿苑寺庭園等)の池護岸石組の基礎構造と同一手法であつて、三宝院庭園の池東部の護岸基礎の下部構造は室町時代作庭の部分をそのまま残していることが明白に知られるのである。

上記の古い基礎の上部に至つて急斜面に高く栗石を石

垣風に積み上げて、根石も小さいものを据えて石組をなした桃山時代の三宝院の新庭園は、ために基礎の中間が軟弱となり、上部の巨大な庭石を用いた石組の重量に堪えかねて、崩れが早くなる結果となつたものである。

秀吉がこの庭園を一ヶ月余りの短い期間に作庭し終らせた彼一流の性急な特攻的工事の裏面には、このような無理があり、また既存の旧地を利用でもしなければ、300坪に余る庭池を新たに穿つて堅牢な池底を打つて漏水を止め、数千の庭石を用いて作庭をなすなど、如何に秀吉の権力と財力をもつて、日々数百人の人夫を使役して行つたとしても出来得る業ではなかつたであろう。

慶長3年8月秀吉は病死した。彼の死後も義演はその意志を継いで工事をすすめ、12月中旬には建築物の大部分が完成した。寝殿、書院、常御所、護摩堂、廊、部屋台所等が建築され庭園との調和もよく、その結構は今古に恥じないものであると義演は日記、慶長4年(1599)

1月1日の条に述べている。その後も義演は庭園の細部に亘る工事を進め、元和10年(1624)までの20数年間に亘る間、かなりの庭園改修工事を行つたのであつた。現在に残る三宝院庭園は、秀吉の指図のもとに新庄越前奉行、河原春仙が行つた作庭の庭景形態よりも、その後に義演の指図によつて河原者貞四郎、さらに同じく河原者賢庭の手になる作庭形態が現在に残るところであろう。

義演と賢庭は、在来の滝口を移動し、島を改築し、池を改修し、植栽を直し、庭石を引いて大いに庭園の整備を行つた。従つて三宝院庭園は作庭当初の秀吉時代の庭園形態よりも義演時代の庭園形態が主となつているわけである。現在の三宝院庭園にみられる石組等の手法は、賢庭が、寛永年間に小堀遠江守政一の指図により作庭石組をなした南禅寺塔頭金地庭方丈庭園の石組手法に同一である。この両者の庭園は、施主と環境事情が異なるため、作庭に用いられた庭石や好みは異なるが、その手法には作庭者が同一人であるために全く共通したものであることは当然である。現在の三宝院庭園の景観が事実上は、慶長年間末から元和10年頃までの間に改修完成に主力をそそがれたもので、作庭年代的にはすでに江戸時代に入つているといひ得るのであるが、庭園の基礎的な構成は秀吉時代にはじまつており、この庭園はもとより桃山時代を代表する形態の庭園であることに間違いはない。

三宝院庭園の作庭構造には、前時代からの手法を残しながら、前述の如く前時代の吉野、室町時代で行はれた堅牢で重厚な作庭手法はすでになく、その基礎構造は繊細ではあるが軟弱な工程をとつてきているのは注目に値する。(写真10. 11. 12参照) 池中島および小島の表書院に対する正面の石組およびその基礎にその特徴がよく現われている。即ち室町時代等の作庭にみられる、石組基

礎池底の補強的な差石、栗石の敷石、堅牢な根石の据え方はなく、比較的小さい自然石を小綺麗に石垣状に積上げ、その上に景石を据え石組している。こうした手法は以後江戸時代に踏襲受けつがれてゆくのである。

三宝院庭園は、江戸時代に入つて、諸建物の移動変更によつて更に庭園の局部に変更が加えられてゆくが、その中心の主要部には重大な変化はなかつたようである。これらについては稿を改めて詳述したいと思う。

註：表書院は柱間を6.5尺を1間とする。入側を含めて東西12間、南北5間。この平面の大きさは義演准后日記、醍醐寺新要録に記された堅12間、横5間の寝殿の寸法に合致する。

SUMMARY

It is already a well-known fact that the garden attached to the Sampoin Sub-Temple which belongs to the Daitokuji Temple was built in the 3rd Year of Keicho (1598) when a cherry-flower viewing party was held at the temple by the Shogun, Hideyoshi Toyotomi, who himself conducted an actual survey of Daigo and gave his instructions on the division of the land and so forth.

The construction of the garden was commenced on April 7 of the same year under his instructions and completed a month later on May 13, which fact deserves to be wondered at in terms of speed.

Whatever a great power Hideyoshi might have as the man who ruled the entire country then, it is still too short a time for which period he should have dug a pond and arranged rocks anew to make the garden.

The repair works carried out on the garden over a period between the early part of January and that of March, this year, revealed that before the garden was built by Hideyoshi, there had already been a garden made previously and that the present one was built by

removing the formerly-arranged rocks, reconstructing and expanding the old pond and arranging the rocks anew in the original garden.

It furnishes us with an interesting material, furthermore, that this garden of Sampoin's, which represents those in the Momoyama Period, has a very weak foundational constitution in sharp contrast to the splendor of its outward form.

② 三宝院庭園 中島附近

写真 ① 下醍醐寺 伽藍惣指図 (義演准后筆)

③ 三宝院庭園 藤戸石前の池景

⑥ 三宝院庭園 中島以東旧池底と護岸石組の基礎状況

④ 三宝院庭園 藤戸石前（中島以東）の旧池々底の状況

⑦ 三宝院庭園 旧池池底、藤戸石前附近の護岸石組とその基礎部分

⑤ 旧池、池底の構造を示めす
青粘土と栗石、砂利を混合突き固めてある

⑧ 三宝院庭園 純浄観前護岸石組とその基礎

⑨ 三宝院庭園 藤戸石前、旧池々底と護岸石組基礎

⑫ 三宝院庭園 中島の西側々面の石組とその基礎

⑩ 三宝院庭園 中島正面石組とその基礎

⑬ 三宝院庭園 中島東南側の石組とその基礎構造

⑪ 三宝院庭園 中島に並ぶ小島正面石組とその基礎

⑭ 三宝院庭園 中島東南側の石組とその基礎構造